

平成22年6月10日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520385

研究課題名（和文） 16-20世紀日記・書簡資料の英語史研究への貢献

研究課題名（英文） Contribution of Non-Literary Texts Such as Sixteenth to Twentieth-Century Diaries and Correspondence to History of English Research

研究代表者

中村 不二夫 (NAKAMURA FUJIO)

愛知県立大学・外国語学部・教授

研究者番号：20149496

研究成果の概要（和文）：英語史研究は長い歴史を有するが、21世紀初頭にあっても、これまで語法分析されていない私的な日記・書簡資料を丹念に調査すると、従来考えられていたよりも早い言語変化の最前線を示す用例や、これまで未発見ないしは稀有な語法を発掘するなど、英語史実の訂正につながる用例に多々出くわす。この点を、8編の論考と2つの国際会議口頭発表、1つの海外におけるゲストレクチャー、1つの国内学会シンポジウムの司会と講師の仕事を通して実証した。

研究成果の概要（英文）：Even in the early 21st century, sundry evidence leading to the correction of English historical facts, including quotations indicating the initial phase of linguistic change and those resulting in the uncovering of rare or unknown usages, can be encountered from the reading of documents such as private diaries and personal letters which have remained linguistically unanalyzed. I tried to demonstrate this by delivering two oral presentations at international linguistic conferences and so on as well as writing eight academic essays.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,400,000	0	1,400,000
2007年度	100,000	30,000	130,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	180,000	2,180,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：英語史 近・現代 日記・書簡 助動詞 do 進行形

## 1. 研究開始当初の背景

英語史研究は、伝統的に、文学作品の言語分析に基づいた研究が主流であった。私は、英語史を志した1970年代末から今日に至るまで、伝統的研究を補う形で、1500-1950年に

書かれた日記・書簡資料を分析し、文法と語彙の歴史を正すことを研究課題としている。これらの資料は、(ア) 言語変化の最前線を知る、(イ) 語法の時代的欠落を補う、(ウ) 消滅したはずの語法が存続しているかどうかを

探求する、(エ) 未発見ないしは報告例がまれな語法を発掘する、(オ) ある時代に生きた庶民の語法に対する生の証言を収集する上で貴重だからである。折しも、20世紀の終わり頃から、外国においても徐々に文学作品以外の英語も調査資料にすることの重要性が認識され始め、私の研究も意義をもつようになった。

まさにこのような背景の中、私は、長い伝統をもつ英語史研究の分野であっても、21世紀初頭の今日でさえ、未踏の16-20世紀日記・書簡資料を大規模に調査・分析すれば、一日本人にも稀有な語法・未知な語法の発掘が可能であるなど、英語史研究へ大いなる貢献ができると考え、研究を開始した。

## 2. 研究の目的

(1) 英語史研究の中で、日記・書簡の英語を集中的にしかも大量に分析した研究は類例がなく、本研究によって行う大規模研究により、主として文学作品に基づいている従来の英語史研究の欠落部分を補おうとした。

(2) とりわけ助動詞 do と進行形は、1700年以降の使用実態についての大規模な通時的研究は皆無に等しい。近代英語後期の1700-1900年の英語は現代英語とほとんど違いがないと誤解され、研究が手薄となっていたためである。この、いわば空白の時期の助動詞 do と進行形の使用実態を解明するため、規模の大きな研究を行おうとした。

## 3. 研究の方法

(1) どのような例を用例として含めるか、あるいは除くか、厳密な分析基準を立て、1例ずつ用例を吟味しながら集めた。基準によって統計数値は大きく変動するため、それに依拠する結論が英語の史実を歪める恐れがあるためである。また、将来、異なる調査資料に基づいて分析結果を得た他の研究者が、私の分析結果と比較できるようにとの配慮からである。たとえば、否定辞 not が動詞の-ing形に後置される構造に現れる動詞と助動詞 do を用いない I say not 型否定平叙文に現れる動詞との相関について論じた論文⑦では、12の基準が立てられているが、一連の研究である論文③、②、①においても基準の一貫性が保たれている。

(2) 書籍資料と電子コーパスの両面から用例を集め、規模の大きな研究となるよう努めた。

(3) 一次資料からの用例収集の結果を厳密な生起数で示すだけでなく、それが歴史的にどのような意義をもつかについても、十分に先行研究を参看した上で詳らかにした。

## 4. 研究成果

(1) 2006年度には、学会発表③において、16-20世紀イギリス英語の日記・書簡を資料に、第1部において、The house is being built 型受動進行形/The house is building 型能受動進行形に使われる動詞の拡散/収束の使用実態を明らかにした上で、その拡散/収束順序には必然性があることを、第2部において、Went he away?のような do を用いない肯定疑問文は、1700年を過ぎると次第に come, do, go, say, think がとる固定表現に収束していき、ついには19世紀中に消滅したことを、第3部において、prevent/save/stop + 目的語 + from + Verb-ing 型構文とその同義構文の、from を脱落させ始めた動詞の拡散順序には必然性があることを詳らかにした。(なお、最初の2点は、2007年度に、雑誌論文⑥、⑤、④として、研究社刊『英語青年』のリレー連載「英語史のなかの語彙拡散と収束」に掲載された。因みに、1年間に及んだこのリレー連載の責任者は私である。)

同年度には、また、否定辞 not が現在分詞/動名詞の-ing形に後置される構造の盛衰を通して、助動詞 do の発達の隠れた側面を浮き彫りにしようと、雑誌論文⑦を執筆した。LOB, BROWN, FLOB, FROWN の4つの電子コーパスと、101種130冊の日記・書簡が網羅的に調査されている。現在分詞と動名詞の別に、単純形 not Verb-ing 対 Verb-ing not、複合形 not being PP 対 being not PP、複合形 not having PP 対 having not PP の生起数が詳細に示されている。用例総数5,536に裏打ちされ、英語史の驚くべき新事実の発見が披露されている。動名詞よりも動詞性の強い現在分詞の場合、単純形であれ複合形であれ、not 後置型が多数存在していた点、特に17世紀後半の複合形では後置率が7割を超えるという驚異的様相を示していた点、多くの人々によって、教養ある人々によってさえも使われていた点を突き止め、史実の訂正を求めた。加えて、not 後置型は、定形動詞節において助動詞 do を伴わない否定形式(たとえば、I know not the news)が投影された構造であり、not 後置型の衰退は助動詞 do の定着を知らせるサインにほかならなかった、not 後置型の歴史は助動詞 do の発達の隠れた側面を物語る貴重な証人であると説いた。

さらに、その他①の示すように、ヘルシンキ大学で、Uncovering of rare or unknown usages: contribution of non-literary texts to history of English research” [稀有または未知の語法の発掘—非文学テキストの英語史研究への貢献]と題し、日記・書簡資料がいかに英語史の新発見に貢献できるかについて、1時間の講演と30分の質疑応答を行った。このゲストレクチャーでは、それ

までに収集していた未知または稀有の語法を例示し、本科学研究費受給研究の青写真を示した。大規模で綿密な未開拓分野の研究であるとして好評を博した。

(2) 2007 年度には、学会発表②に示されているように、40th Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea [第 40 回ヨーロッパ言語学会、於フィンランド共和国ヨensuu 大学]において、“Uncovering of rare or unknown Usage: a history of *seem* meaning ‘to pretend’ [未知ないしは稀有の語法の発掘—「ふりをする」を意味する動詞 *seem* の歴史]”と題する口頭発表を行った。この語法はこれまで、シェイクスピアに 7 例、19 世紀末の英国南部方言に 1 例報告されているだけである。この発表で両者の間の時期から多数の用例を提示したことにより、ブリテン島の日常語レベルでは存続していたという新事実が明らかとなった。日記・書簡資料がいかに英語史の新発見に貢献できるかについて証明したことになる。トピック自体は小さいが、根拠となる用例の豊富さ、アメリカ英語をも射程に入れた歴史観が評価された。発表後に受けた“Brilliant!”、“Congratulations!”という賛辞が物語るように、私のこれまでの国際会議の発表のなかでベスト 5 に入る高い評価を得た発表となった。2010 年 7 月に Peter Lang 社から刊行される予定の専門書に所収されている。

また、すでに(1)に言及されているように、2007 年度には、前年度のシンポジウムの発表内容に基づき、雑誌論文⑥、⑤、④を執筆した。⑥と⑤は、動詞総数 372 用例総数 2,365 に依拠している研究結果である。④は、裏打ちしている用例総数は 799 でしかないが、110 種類 144 冊の日記・書簡を網羅的に調査した研究である。定説では受動進行形の確立は 1900 年頃とされているが、本研究では 1820 ~1850 年頃であるとの新事実を引き出した。これは、日常語レベルの英語では、文学言語に比べて、言語変化の速度が半世紀以上早いということを示しており、日記・書簡資料が言語変化の最前線を知る上で欠かせないこと、英語史研究に大きな貢献ができることを物語っている。

さらに、雑誌論文⑦の継続研究として、雑誌論文③と②を発表した。

③は、歴史的原理に基づいて編纂された世界最大の英英辞書 Oxford English Dictionary 第 2 版 CD-ROM 版の引証部分を分析した研究である。古い時代には異綴りが数多く存在するが、用例の収集漏れがないよう、それらにも細心の注意を払った。具体的には、OED<sup>2</sup> on CD-ROM の advanced search 機能を利用し、-ing, -inge, -yng, -ynge のいずれかと否定辞 not, nott, nat, nought, no 3 t のいずれかが共起し、両者の間に最大 5 単語まで他の

単語が介在することを許す例文をすべてリスト化した。44,181 例集まった。ただ、語尾に-ing(e)や-yng(e)を有する語の中には名詞や形容詞もある(たとえば、building「建物」や interesting)。また、モニター上のリストでは例文の語数が極端に限られており文脈が不十分である。そこで、44,181 例の一つ一つについて、定義直下の引証全文に戻り、目指す例文であるかどうかを吟味した。その結果、最終的に、14-20 世紀に、単純現在分詞の not 前置型 not Verb-ing が 1,686 例、not 後置型 Verb-ing not が 180 例、単純動名詞の not 前置型 not Verb-ing が 472 例、not 後置型 Verb-ing not が 9 例集まった。複合形は、複合現在分詞の not 前置型 not being PP が 100 例、not 後置型 being not PP が 68 例、複合動名詞の not 前置型が not being PP が 29 例、not 後置型 being not PP が 1 例、複合現在分詞の not 前置型 not having PP が 65 例、not 後置型 having not PP が 19 例、複合動名詞の not 前置型 not having PP が 27 例、not 後置型 having not PP が 1 例集まった。これらのうち、複合形について、50 年ごとに前置型と後置型の競合をまとめた研究が雑誌論文③である。

結論として、雑誌論文⑦と同様の結果が引き出されている。これまで英語史研究の中でほとんど知られていない後置構造が、実際には頻繁に使われていた点、重厚な劇・小説・随筆・宗教散文など文学史にその名を残す著名な作家によって、また、Sir の爵位をもつ者や、公文書にも、歴史書や紀行文にも、学術書や研究論文にも、学識ある人物の英訳にも使われていたことが判明した。多岐に亘るジャンルにおいて、改まった英語が期待される史料において使われた点を考慮すると、この語法は、前期近代英語では容認されていた語法だったと考えざるをえない。これらは驚くべき事実の発掘であり、史実を訂正しなければならないと、雑誌論文⑦で述べた結論の妥当性を補強した。

雑誌論文②は、1417-1681 年に書かれた書簡からなる CEECS コーパス、1640-1740 年に書かれたパンフレットからなる Lampeter コーパス、1674-1692 年に書かれたニューズレターからなる Newdigate コーパスを材料に、雑誌論文③や後述の①と同一の条件で not 後置型-ing 形の盛衰を探求した研究である。出現した用例は、単純現在分詞の not Verb-ing が 454 例、Verb-ing not が 100 例、単純動名詞の not Verb-ing が 218 例、Verb-ing not が 1 例であった。複合形は、複合現在分詞の not being PP が 41 例、being not PP が 39 例、複合動名詞の not being PP が 7 例、being not PP が 1 例、複合現在分詞の not having PP が 33 例、having not PP が 21 例、複合動名詞の not having PP が 6 例、having not PP

が0例であった。これらを50年ごとに前置型と後置型の競合をまとめた結果、⑦や③の主張を裏付ける結果が得られた。

(3) 2008年度には、“Uncovering of rare or unknown usages: a history of participles/gerunds followed by *not*” [稀有または未知の語法の発掘—*not* 後置型-ing形の歴史]という題目で、15th International Conference on English Historical Linguistics [第15回国際英語史会議、8月24日-30日、於ドイツ連邦共和国ミュンヘン大学]で口頭発表を行った(学会発表①)。雑誌論文⑦、③、②、①の要点に加え、1億語からなるBNCコーパスの分析結果をも提示し、他の追従を許さない大規模研究となるよう努めた。*not* 後置型と前置型を合わせ、用例総数11,346例に裏打ちされた研究結果であった。*not* 後置型は、これまでにほんの4人の文法家が、しかも断片的に「こんな極めて珍しい語法もある。」という程度の言及をしているにすぎなかった。しかし、私の発表により、英語の歴史のなかでは、特に非文学言語の歴史のなかでは、*not* 後置型-ing形は夥しいほど使用されていたという史実が明るみになった。この発表は助動詞 *do* に密接に関連した研究で、日記・書簡資料の調査が英語史の修正に多大な貢献が可能であることを改めて証明した。好評であったため、近い将来、このトピックに関する研究を300~400ページからなる1冊の著書にまとめようと現在奮闘中である。

2008年度には、また、雑誌論文⑦、③、②の継続研究として、雑誌論文①を発表した。これは、14-20世紀の用例として、OED<sup>2</sup> on CD-ROMの引証部分から集めた、単純現在分詞の *not* 前置型 *not* Verb-ing 1,686例、*not* 後置型 Verb-ing *not* 180例、単純動名詞の *not* 前置型 *not* Verb-ing 472例、*not* 後置型 Verb-ing *not* 9例を50年ごとに前置型と後置型の競合をまとめた研究である。雑誌論文⑦、③、②の結論とほぼ一致する。雑誌論文⑦、③、②、学会発表①、雑誌論文①による一連の研究は、当時の文法規則を根底から覆すような大発見ではないにしても、高い頻度で使われていた割に英語史家によって取り上げられることのなかった稀有な語法の発掘という点で意義深い。歴史認識を改める必要がある。

以上のように、第5節に示されている8編の論考と2つの国際会議口頭発表、1つの海外におけるゲストレクチャー、1つの国内学会シンポジウムの司会と講師の仕事を通して、日記・書簡資料が英語史研究へ大きく貢献できることを示した。まとめると次のようになる。

学会発表③の第1部と雑誌論文④において、

また、学会発表③の第3部において、日記・書簡資料が言語変化の最前線を知る上でいかに重要であるかを、受動進行形の歴史調査、および、prevent/save/stop + 目的語 + from + Verb-ing 型構文とその同義構文の from の不使用の歴史調査を通じて示した。学会発表③の第2部と雑誌論文⑥と⑤においては、助動詞 *do* を用いない古いタイプの肯定疑問文が、日常語レベルの英語が期待される日記・書簡資料に遅くまで残存していたことを示した。学会発表②では、これまでシェイクスピアに7例、19世紀末の英国南部方言に1例報告されているだけの語法、「ふりをする」を意味する動詞 *seem* の歴史を、アメリカ英語に残存している理由にも迫りながら、明らかにした。研究手薄な日記・書簡資料の調査は、未発見ないしは稀有な語法の発掘に貢献できることを物語っている。雑誌論文⑦、学会発表①、雑誌論文③、②、①の、*not* 後置型-ing形の盛衰に関する一連の研究は、次の事実を明らかにした。*not* 後置型は、これまで文法家の注意を引くことがほとんどなかった極めて珍しい語法であった。しかし、それは、それまでの研究が文学作品に偏っていたためにほかならない。日常レベルの言語使用が期待される日記・書簡資料を分析した私の発表により、英語の歴史の中では、特に非文学言語の歴史の中では、*not* 後置型は頻繁に使用されていたという史実が明るみになった。

英語史研究の中で、日記・書簡の英語を集中的にしかも大量に分析した研究は類例がなく、私が行った大規模研究は、主として文学言語に基づいている従来の英語史研究とは一線を画し、その欠落部分を補うことになるであろう。国内外の研究の中で異彩を放つ研究を世に示せたと判断している。今後も更なる展開を行いたい。

##### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

- ① 中村不二夫、「*Not*後置型-ing形の盛衰—助動詞*do*の発達の隠れた側面 (4) OED<sup>2</sup> on CD-ROMを根拠に (下)」、*Mulberry*、第58号、pp. 63-105 [A5判]、2009、査読なし
- ② 中村不二夫、「*Not*後置型-ing形の盛衰—助動詞*do*の発達の隠れた側面 (3) CEECS, Lampeter, Newdigateコーパスを根拠に」、*Mulberry*、第57号、pp. 63-98 [A5判]、2008、査読なし
- ③ 中村不二夫、「*Not*後置型-ing形の盛衰—助動詞*do*の発達の隠れた側面 (2) OED<sup>2</sup> on CD-ROMを根拠に (上)」『愛知県立大学文

- 学部論集 (英文学科編)』、第 56 号、pp. 45-63 [A5 判]、2008、査読なし
- ④ 中村不二夫、「受動進行形の動詞の拡散、能受動進行形の動詞の収束」、リレー連載「英語史のなかの語彙拡散と収束」(12)、『英語青年』(研究社)、第 153 巻第 12 号、pp. 46-49 [B5 判 2 段組]、2008、査読なし
- ⑤ 中村不二夫、「How do you?—助動詞doを用いない肯定疑問文に使われた動詞の収束 (下)」、リレー連載「英語史のなかの語彙拡散と収束」(5)、『英語青年』(研究社)、第 153 巻第 5 号、pp. 42-45 [B5 判 2 段組]、2007、査読なし
- ⑥ 中村不二夫、「How do you?—助動詞doを用いない肯定疑問文に使われた動詞の収束 (上)」、リレー連載「英語史のなかの語彙拡散と収束」(4)、『英語青年』(研究社)、第 153 巻第 4 号、pp. 42-45、[B5 判 2 段組]、2007、査読なし
- ⑦ 中村不二夫、「Not後置型-ing形の盛衰—助動詞doの発達の隠れた側面 (1)16-20世紀日記・書簡資料を根拠に」、『愛知県立大学文学部論集 (英文学科編)』、第 55 号、pp. 41-86 [A5 判]、2007、査読なし
- ⑧ 中村不二夫、「20 世紀英語の変化—時代の証言者としての英英辞書」、『英語青年』(研究社)、第 152 巻第 9 号、pp. 44-45、[B5 判 2 段組]、2006、査読なし

[学会発表] (計 3 件)

- ① 中村不二夫、“Uncovering of rare or unknown usages: a history of participles/gerunds followed by *not*”, 15th International Conference on English Historical Linguistics, University of Munich (「稀有または未知の語法の発掘—not後置型-ing形の歴史」、第 15 回国際英語史会議、於ミュンヘン大学 [ドイツ連邦共和国])、2008 年 8 月 26 日
- ② 中村不二夫、“Uncovering of rare or unknown usages: a history of *seem* meaning ‘to pretend’ ”, 40th Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea, University of Joensuu (「稀有または未知の語法の発掘—動詞seem「～のふりをする」の歴史」、第 40 回ヨーロッパ言語学会、於ヨエンスウ大学 [フィンランド共和国])、2007 年 8 月 31 日
- ③ 中村不二夫、学会シンポジウム「言語変化と語彙拡散／収束の諸相」司会と講師、担当「受動進行形と動詞の拡散／収束」、近代英語協会第 23 回大会、於名古屋大学、2006 年 5 月 19 日

[その他] (計 1 件)

- ① ゲストレクチャー  
中村不二夫、“Uncovering of rare or unknown usages: contribution of non-literary texts to history of English research” (「稀有または未知の語法の発掘—非文学テキストの英語史研究への貢献」、ゲストレクチャー、於ヘルシンキ大学 [フィンランド共和国])、2007 年 3 月 13 日

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

中村 不二夫 (NAKAMURA FUJIO)  
愛知県立大学・外国語学部・教授  
研究者番号：20149496